

白隠禪師に学ぶ

鎌倉淡青会公開セミナー

平成三十年七月三十一日 臨濟宗円覚寺派管長 横田南嶺

白隠慧鶴（貞享二年1685〜明和五年1768）

貞享二年	1685	一歳
元禄二年	1689	五歳
元禄八年	1695	十一歳
元禄九年	1696	十二歳
元禄十二年	1699	十六歳
元禄十六年	1703	十九歳
宝永元年	1704	二十歳
宝永四年	1707	二三歳
宝永五年	1708	二四歳
宝永七年	1710	二六歳
正徳五年	1715	三一歳
享保元年	1716	三二歳
享保二年	1717	三三歳
享保一一	1726	四二歳
享保一二	1727	四三歳
寛保三年	1743	五九歳
延享二年	1745	六一歳
寛延元年	1748	六四歳
宝暦九年	1759	七五歳
宝暦十年	1760	七六歳
宝暦十三年	1763	七九歳
明和五年	1768	八四歳

駿河の原宿で生誕。幼名岩次郎。

一人海に向かい浮雲の去来するを見て世の無常を感じ。母に随つて寺に参り地獄の説法を聴いて怖れおののく鍋冠日親の話を聞いて出家を志す

原松蔭寺にて単嶺祖伝のもとで出家。

沼津の大聖寺息道に師事する。

清水の禅叢寺の僧堂に掛錫するが、『江湖風月集』の提唱を聴き巖頭渡子の話に触れ「仏法は虚妄なり」と禅に失望し詩文に耽る。

美濃の瑞雲寺で修行。雲棲株宏の『禅関策進』によって修行に開眼。この年母逝去す。

宝永の噴火。大地震に寺の者皆郊外に逃げるも独り堂内より出ず坐禅に打ち込む

越後高田の英巖寺性徹和尚のもとで遠寺の鐘声を聴いて豁然開悟。その後、信州（長野県）飯山の道鏡慧端（正受老人）のもとで更に大悟す。

京都の北白川で白幽子という仙人に内観法を学び、禅病が完治する。

美濃加茂市巖瀧山にて山中独摂心諸方の遊歴より、十一月松蔭寺に帰郷。

松蔭寺に入寺。『大慧書』『禅門宝訓』を提唱す。

秋法華経を読んで庭のコオロギの声を聞いて法華の真理を悟り覚えす号泣、正受老人の平生受用を徹見す。

庄司幽斎の娘、察一六歳にして来参。

東嶺円慈来参。

延命十句観音経を弘め始める。

庵原の平四郎来参。

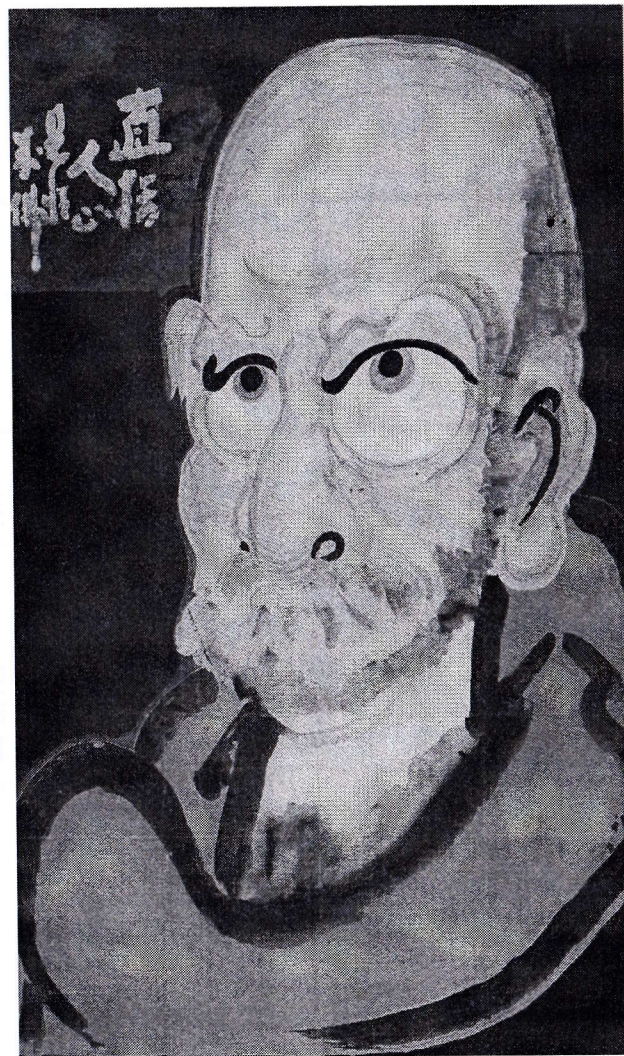
『延命十句観音経靈験記』を上梓す。

三島の龍澤寺を中興開山。東嶺を龍澤寺住持に命ず。

衰弱と老いが重なるも夢に諸老師に見え力を回復す。

松蔭寺にて示寂。

一、見性悟道―真実の自己に目覚める



直指人心
見性成仏

隻手布袋図（永青文庫蔵）



若ひ者共や 何を云ふてもな 隻手の音を きかねば皆たわ事の皮だぞよ
さる所の八十二才のおやぢ

此五六年以来は思い付きたる事侍りて隻手の声を聞き届けたまひてみよと人毎に指南し侍るに、従前の指南と抜群の相違ありて誰にも疑団起こり易く工夫進み易きこと雲泥の隔て有るように覚え侍り。是に依りて唯今専一に隻手の工夫を勧め侍り。（藪柑子）

総じて参学は妄念情量と戦い、昏沈睡魔と戦い、動静違順と戦い、是非憎愛と戦い、一切の塵境と相戦い、正念工夫を推し立ててもて行く張り合いて不慮の省覚はこれあることに侍り。（遠羅天釜）

一、氣海丹田―体を調える



心を氣海丹田の間に凝らしむれば則ち氣聚まる、氣聚まるときんば丹成る、丹成るときんば寿（いのちながし）

「心火逆上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、舉措恐怖多く、心身困倦し、寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に涙を帶ぶ。此に於て、遍く明師に投じ、廣く名醫を探ると云へども、百藥寸功なし」

「已^{やんぬるかな}哉、觀理、度に過ぎ、進修、節を失して、終に此の重症を發す、実に医治し難き者は公の禪病なり。」

白幽子「公、今既に觀理の為に破らる。勤めて内觀の功を積まずんば、終に起つこと能わじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり」

「若し此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず、眼を合せざる以前に向つて、長く兩脚を展べ、強く踏みそろへ、一身の元氣をして、臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。」

我が此の氣海丹田腰脚足心、総に是れ我が本来の面目、面目何の鼻孔がある。

我が此の氣海丹田、総に是れ我が本分の家郷、家郷何の消息がある。

我が此の氣海丹田、総に是れ我が唯心の浄土、浄土何の莊嚴がある。

我が此の氣海丹田、総に是れ我が己心の彌陀、彌陀何の法をか説くと、打返し打返し常に斯の如く妄想すべし。妄想の功果積らば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓠然たる事、未だ篠打せざる鞠の如けん。」



「大凡、生を養ひ長壽を保つの要は、形を鍊るに如かず。形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝る則是氣聚る。氣聚る則是即ち真丹成る。丹成る則是形固し。形固き則是神全し。神全き則是壽し。」

延命十句觀音經

觀世音南無佛與佛有因
與佛有緣佛法僧緣常樂
我淨朝念觀世音暮念觀
世音念々從心起念々不離
心



白隱年譜 延享二年（1745）六十一歳

又、井上平馬は江府の公臣なり。嘗て十句觀音經を信じて印行す。一日卒死して冥府に入る。閻王曰く、「汝斯の經を通流せしむと雖も力弱くして之を弘むること能わず。而今閻浮提日本國駿陽に白隱という者有り。憑つて流行せしめば則ち其の功汝に倍徒せん。只此に在るのみ」と。平馬勃如として蘇る。面り閻王の命を受けて、直に价書を修して以つて師に啓す。師此より専ら弘通す。後來平馬來謁して委説す。

一、地獄大菩薩―地獄に入る



崔郎中問う。大善知識還つて地獄に入るや也無や。師云く、老僧は末上に入る。崔云く、既に是れ大善知識、什麼^{なん}としてか地獄に入る。師云く、老僧若し入らずんば、争^{いかで}か郎中に見^あうを得ん。(趙州禅師語録)

白隠禅師と百姓一揆

六十三歳 延享四年(1748年)

此の歳、飢饉なり。庵居の諸禅分散す。達磨忌に曰く、風怒濤を捲き、田苑荒る。吾が野鬼閑神は分離せり。心肝に鉄を挟む二十輩、共に菜根茎を嚙んで苦辛を甘なう。

六十六歳 寛延三年(1750年) 明石の龍谷寺に招かれて『息耕録』評唱

六十七歳 寛延四年(1751年) 岡山の少林寺にて『川老金剛經』を提唱

寛延二年(1749年) 姫路藩百姓一揆

このころの姫路藩の財政は極めて厳しく、江戸、大阪の豪商や藩内の商人に、年貢を抵当にして多額の借財をしていた。そのため領内の町民、百姓に負担を強いて、年貢の取り立てはますます厳しくなっていた。しかも寛延元年は大不作で、百姓は藩に對し年貢の減免や延納を願い出たが認められなかった。そのため、領内のあちこちで百姓の蜂起が始まった。置塩村でも、古知ノ庄の百姓、滑の甚兵衛をはじめ塩田の利兵衛、又坂の与次右衛門を指導者として、寛延二年一月二十八日に蜂起し、庄屋を打ち壊し、焼き討ちにした。この動きは周辺地域を巻き込んで総勢一万人余りの大一揆となった。藩は大坂奉行所の応援を得てようやく鎮圧した。鎮圧にあたって藩は船場本徳寺の僧侶に依頼して一揆の指導者の説得に当たらせたといい。その結果、三百四十五名が捕らえられ、磔、獄門、遠島、追放などの重刑に処せられた

(芳澤勝弘『白隠禅師年譜』三二九頁)

『壁訴訟』

「三四十年来、播州姫路を初め、所々において百姓ども反逆し、徒党を組み、数百人蜂起し、城を囲み、竹槍撚て武士にむかふ事、大凡七八ヶ所に及べり。

…窮鼠却て猫を咬むと云けんか、蠅螂臂を張つて立車に向ふとせんか。はたまた数

万人百姓皆な尽く顛狂せりと云んか、物の付いたりとせんか。云く、しからず、

：聚斂私曲の役人ありて、如何なる凶年飢歳をも顧みず、非道に百姓を絞り取るを以て忠節とし、大旱魃又は水難ありて、万頃の地面つぶ一粒もなきをも少しも見分けず、定めなりと称して、一粒も寛るげず、例年の通り責め取り、剩さへ定め切替へなるはなど、種々の道理をつけて、年々一石に付き五升八升づゝ賦税を切り上げ、民の悲嘆を総に顧みる事なし。余りせん方なさに、鍋釜を売り、衣類を質物に入れて：次第に困窮逼迫して、妻子を養ふに方便なく、果ては飢へ死するより外せん方ぞなけれ。とても死すべき途なれば、怨念の箭一つ射つけて、湯とも水ともなるべしと思ひ定め、覚悟を居へて指し起りたる謀返なるべし」。〔芳澤勝弘『白隠禅師年譜』三二八頁〕

宝暦五年（1755年）七十一歳

春、駿州小島の龍津寺で維摩經会

二月、駿州小島龍津寺の石鼎和尚の請によつて『維摩經』を講じた。東嶺円慈が総監、華藏寺の池川が副司、遂翁が知客となつた。龍津寺の大檀越である小島藩主の松平安房守昌信（一七二八〜七一この時二八歳）が毎日聴聞した。

白隠禅師が松平昌信に与えた法語『夜船閑話 卷之下』（宝暦五年）

如何指揮して國強き事を得べきぞとならば、⁽¹⁾生民を安撫し、仕役を寛るめ、賦税を軽くし、仁澤を施し玉ふべし。如何賦税を輕ふし、仁澤を施すべきぞとならば、⁽²⁾酒宴亂舞の狂遊を杜絶し、⁽³⁾田射遊獵の凶態を⁽⁴⁾停止し、⁽⁵⁾讒⁽⁶⁾誂追従の佞臣を追ひ退け、⁽⁷⁾明眸皎齒の婢妾を忌み棄て、夏冬の衣類も都て綿布にし去り、朝夕の膳部も常に一菜に過ぎず、萬事を省略し將ち去て、其餘計を放て、窮民を救ひ老病を憐み玉ふより外、縦ひ⁽⁸⁾堯舜禹湯⁽⁹⁾文武の君といへども、別的手段是有るべからず。

明和四年（1767年）八十三歳

三月三日、西島の光増寺で大燈録会を閲読、五日、あまり参衆が多かつたために本堂の床が抜けた。〔中宝山折床会法語〕（光増寺蔵）